

チーム育児がワーク・ライフ・バランス満足度を高める

秋田喜代美 東京大学大学院教育学研究科教授



日本の母親のワーク・ライフ・バランス満足度は、4か国中で一番低く、しかもその結果が顕著であることが見えてきました。国際比較を通して日本の課題が改めて浮き彫りになったと言えるでしょう。中国の母親の方が帰宅時間は日本よりも遅い。けれども、中国では祖父母同居率が高く、母親の育児・家事が祖父母に支えられていることが分かります。そして日本の育児も、予想通り帰宅時間が4か国中で一番遅いこと、しかし、中でもできる家事や育児に協力しようとしている前向き姿勢の父親の存在も見えてきました。「父親が家族の一員として取り組める家事に取り組むほど母親の満足度が高い」という結果は、育児・家事を夫婦がチームで担い支え合うことが母親の満足度を高めることを意味しています。また、日本では園の一時預かりなどの活用も他国に比べて高いことも見えてきています。つまり、賢く地域の子育ての支援を活用していくこと、またそうした仕組みを行政が創っていくことの必要性も見えてきます。母親を育児・家事で孤立させず、夫婦や親族、そして地域の皆で分担しながら、チームで育児・家事にあたることで、母親のワーク・ライフ・バランスの満足度を高めていくために大切と言うことができます。この母親のワーク・ライフ・

バランスの満足度が、父親にとっても子どもにとっても満足感や雰囲気の良い親密な関係を生み出していくであろうことが予想できます。

また、ワーク・ライフ・バランスを考える時には、当然のことながら、母親だけではなく父親側にも目を向ける必要があります。そのためには、まず子育て期の会社からの帰宅時間について、このような国際比較データをもとにして社会全体で考えていくことがとても大事だと思います。生産性や効率的な働き方が問われます。また父親と母親のワーク・ライフ・バランスの満足度がともに高まるためには、それぞれが、どのような姿を、それぞれにとって望ましい家事・育児・仕事の分担だと考えているのかを、夫婦間で対話しておくことも大事だと思います。また、子どもが小さい時期と少し大きくなってから等、長期的にどのようにワークとライフのバランスを考えていくのか、それに近い姿を実現するために夫婦だけではなく、どのようにしてさまざまなアウトソーシングや、親族、友人、地域のサポートを活用できるかの情報を得ていくことも大事だといえるでしょう。それによって、育児・家事の充実と同時に、個人の幸せや満足の実現だけでなく、家族全員の幸せや満足も高めていけるように考えることが大事だと思われます。

中国の幼児の母親のワーク・ライフ・バランスを考える

一見真理子 国立教育政策研究所 総括研究官



昨年来、日本でも公開され、評判を呼んでいるドキュメンタリー映画「いのちのはじまりー子育てが未来をつくる」(2016年、ブラジル・エステラ=ヘネル監督)を見ました。国連児童基金(UNICEF)も共同出資しているその作品は、乳幼児が親・養育者とともに過ごす時間がいかに大切かを、エビデンスを通して、またリアルな現場取材から訴えるものでした。ちなみに、世界9か国からの子育て最前線の例として東アジアから唯一選ばれたのが中国、しかも父母以上に育児に本腰を入れて夢を託す素朴な祖父母の姿でした。このことを念頭に、今回の結果を見てみたいと思います。

調査対象国のうち、中国の有職母親の6割近くは「自分もしくは配偶者の父母」と同居しており、母親の8割以上が日常の子育ての担い手として「祖父母・親せき」を挙げています。子どもの祖父母世代との同居率、子育てへの依存率ともに、断然トップの数値です。母親たちは1980年以降に生まれた一人っ子世代で、その祖父母世代も「隔世育児」に励む様子がうかがえます。なお、有職母親でわが子と同居していない率が最も高いのも中国(12%)で、祖父母・親戚が母親に代わって子育てしていることがうかがわれます。

さらに、中国の有職母親の帰宅時間は、調査対象国の中では遅めで子どもと一緒に過ごす時間は最短と結果が出ました。短い時間に母親として何に注力するのかといえば、周囲のサポートがあるだけに、生活面の世話ではなく、子どもの教育に関する情報収集やしつけ・知育のかかわりにどうやら焦点化しているようです。彼女たちは生育過程においても、他者の面倒をみることもよみ自分の知的成長や学業・仕事への傾注を促されてきたといえてよいでしょうから、得意な分野で子育てにかかわっているようです。

一方、幼児の祖母世代はといえば、社会主義計画経済から市場経済への移行期に都市部のフルタイム就労者だったとすれば、多くは産休・育休明けから、わが子を家族やベビーシッター、託児所・幼児園に託して職業生活を走り抜け、55歳かそれ以前に定年を迎えていることが考えられます。

まだまだ元気な退職後によく自分の手で育児をするチャンスがまわってきて、それが第二の人生の喜びになることもよく言われています。冒頭の映画で「祖父母にも役割がある」と強調するのに中国を取材したことは、以上からもうなげます。

なお祖父母のみの育児の問題点や、母親自身が子どもとともに過ごすことの重要性は、よく専門家などから指摘されるようになり、母親自身は、育児を他者任せにすることに無自覚ではいられなくなっています。しかし、厳しい競争社会の中で社会参加している母親には、育児への専心は容易にできない現実であり、そのことは、「有職母親の子育て意識」のアンビバレントな回答にも表れているようです^{注1}。

最後に、母親の心理的な安定にもつながる夫(父親)の家事・育児への参加ですが、2005年の「東アジア5都市 幼児の生活調査」^{注2}、2010年の「東アジア4都市 乳幼児の父親調査」^{注3}では、中国の父親の生活は日本と比べてゆとりがあることが、帰宅時間の早さ、家事や育児にかかる時間、妻との日常的なパートナーシップなどを例に指摘されました。しかし今回の調査からは、中国の父親の帰宅時間も以前よりも遅くなり、子どもとの接触時間が減っていること、母親同様、家事と子どもの生活面の世話は、便利家電や祖父母に任せ、しつけ・遊びなどの面で役割を果たしている傾向が読み取れました。

親集団の世代交代や情報通信技術の急速な進化などによる就労状況の変化などが、育児をめぐる母親のワーク・ライフ・バランスにも変化をもたらしていること、しかしながら次世代育成に異世代で協力分担して取り組む中国の「生育文化」の伝統は、時代が変化しても息づいていることの双方が見えました。

注1. 「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」か「母親がいつも一緒でなくても、愛をもって育てればいい」の2択を問う設問で、中国の有職母親の8割が「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」を選択。
注2,注3. ベネッセ教育総合研究所で実施。

「働き方改革」で、母親・父親が共に育児もできる帰宅時間の実現が望まれる

ベネッセ教育総合研究所 持田聖子

日本の労働者の労働時間の長さ、それが子育てへの参画に及ぼす影響は、少子化の課題のひとつになっています。本調査でも、日本(首都圏)の働く母親、父親の帰宅時間は、4か国の中で遅い傾向にありました。その結果、特に、父親が仕事のある日、子どもと一緒に過ごす時間は、もっとも短く、育児への取り組み頻度も、他国と比較して低い傾向にありました。一方、日本の父親が「食事の後片づけ」「洗濯」「ごみ出し」といった家事を「週3日以上」行う頻度は、帰宅時間がもっとも早いフィンランドの父親について高く、特に「洗濯」は4か国の中でも、もっとも高い結果でした。これらの家事は、帰宅時間が遅くても取り組める家事といえます。中国のように祖父母の日常的な協力を十分に得ていない日本(首都圏)の働く母親は、帰宅後、子どもの育児を中心に担い、父親は、

帰宅時間に縛られない家事を担っていることがうかがわれます。

母親のワーク・ライフ・バランス満足度は、4か国の中では日本がもっとも低い結果となりました。満足度の低さには様々な要因が考えられますが、今回の調査結果からは、父親の家事頻度が高い場合、母親の満足度はより高くなる傾向がみられました。

「働き方改革」により、今後、日本の父親が、より早く帰宅できるようになり、家事だけでなく、もっと子どもと一緒に過ごし、育児にも、母親と共にかけられるような環境づくりが望めます。本調査が、共働きの進む日本の家庭において、母親と父親が共に家事・育児を担うバランスを考えるヒントになることを願っています。

インドネシアにおけるワーク・ライフ・バランス



Sofia Hartati

Dean, Faculty of Education, State University of Jakarta

「幼児期の家庭教育国際調査」の結果から私が結論づけたのは、調査対象となった4か国の中では、インドネシアの女性は仕事や子育てへの満足度が比較的高いということだ。これは、母親が子どもと一緒に過ごす時間、家事をこなす時間、仕事から帰る時間、父親や他の家族による支援などに関するデータの要素と関係している。インドネシアにおける有職の母親の傾向は、今回の資料が示す結果と基本的には同じである。つまり、女性は家庭と仕事のどちらに対しても高い満足を感じている。これは、インドネシアの文化には、女性は家事をこなし、子育てをして、よく父親の世話をする女性像であるべきだという教えがあるからである。

家庭内での父親の家事分担については、インドネシアにおいて、掃除、皿洗い、洗濯、ごみ捨て、食事の準備などを男性が行うことは一般的ではない。インドネシアでは、男性は家族を養う生活費・収入をもたらす大黒柱であるべきだという考えがあるため、家事は母親が担当している。しかし時代の変化により、女性も良い主婦というだけでなく、家族の経済状態を改善するために仕事に就いて働くという選択肢を選ばなくてはならなくなっている。本来の文化とこの時代変化によって、インドネシアの女性は仕事と家庭という二種類の責務をこなさなくてはならなくなっているのだ。

ジャカルタの有職の母親は父親よりも早く帰宅するが、それは食事の準備、子どもの世話などの家事があるためである。一方で、父親の帰宅が母親より遅いのは、家族のためにより多くの収入を得なくてはならないからだ。父親の帰宅時には、母親がほとんどの家事を終わらせており、父親は残った家事の一部を多少手伝うだけである。

平日、親が子ども達と一緒に過ごすのは朝食時(6時から7時)と帰宅(16時)してから子どもが寝る(21時頃)までの時間であり、通常は約5～6時間になる。休日には子どもと一緒にいる時間は長くなるが、その一方で、時には親が子どもと一緒にいる以外の活動を行う場合もある。母親が家族のために買い物する場合もあれば、父親が収入増を目的として副

業を行う場合もあるし、室内で休息をとることもあるだろう。しかし基本的には休日には家族で過ごすことには変わらない。

子育てにおいて、近所の人々の社会的役割はインドネシアでは大きな影響を持つ。インドネシアは、親切で心優しく、お互い喜んで助け合おうという文化を持つ国であり、両親が仕事でいない間、近所に暮らす家族の子ども達が一緒に遊ぶのは頻繁に見られる光景だ。子どもは一人で遊ぶことはあまりなく、近所に住む少なくとも2、3人以上で集まって遊ぶことが多い。

祖父母の役割は、金銭的支援よりもむしろ子どもの面倒をみることにあり、家事を分担することにある。インドネシアでは、子どもがすでに結婚もして働いている場合は、親からの財政的な援助を受けることはない。もちろんそれは祖父母の経済状態にもよるので、もし祖父母の経済状態が子ども世代より豊かであるとすれば、金銭的にも実際の手助けとしても支援することもありうる。反対に、祖父母の経済状況が苦しい場合は、子ども世代が親に定期的な金銭の支援を行う。祖父母の世話をする人がいる場合、祖父母は自分達の自宅で暮らしていることが多い。もし世話ができる人がいない場合には、結婚した娘との同居が多い。文化的にも、また宗教の教えとしても、子どもは親を軽視してはならない、子どもは親を尊敬し大切にしなければならぬとされている。なぜ娘の家族との同居を選択するのか。その理由としては、娘は息子より多くの家事を担当し、家庭での用事をより多くこなさなくてはならないため、家は女性が所有しているものといえるからだ。このため母親が働く場合には、母親側の両親が子どもの面倒を見るのがインドネシアの家庭では一般的であり、それが信頼もできて安心だとみなされている。

「幼児期の家庭教育国際調査」のインドネシアデータが示す通り、インドネシアの女性が家庭と仕事に対して高い満足度を持っているというのは、正確な結果であると思う。今後の展望としては、インドネシアでの子育てに対する祖父母の役割、コミュニティの役割に関する調査を提案したい。

フィンランドにおける未就学児を持つ家庭生活についての考察

Risto Hotulainen, Associate Professor(left) / Sirkku Kupiainen, Special Adviser(right)
Centre for Educational Assessment, University of Helsinki



「幼児期の家庭教育国際調査」には、フィンランドの子どもと家族の生活について、注目すべき比較結果が示されている。同調査では、子育て慣習および家庭生活に影響を及ぼしている要因について、フィンランドと調査対象のアジア諸国との間に興味深い文化的差異があることも分かった。

同調査は子どもを保育所とプレスクールに預けている母親だけを対象にしたものだが、フィンランドデータにおけるフルタイム勤務の母親の比率は日本のほぼ2倍であり、インドネシアと比較した場合には3倍も高い。フルタイム勤務比率については、中国のみがフィンランドと同等であった(78%対89%)。一方で、フルタイム勤務の父親の比率はどの国でもほぼ同等であった。フィンランドと日本の母親の違いについての理由の1つに、同じフルタイム勤務であっても、フィンランドでは5人中4人の母親が午後5時前に帰宅できるという点が挙げられる。一方、日本では、午後5時以降にしか帰宅できない母親が数多くおり、しかもそのほとんどはさらに1時間以上遅い帰宅となる。父親については、フィンランドでは半数以上の父親が午後5時には帰宅している。フィンランドと日本の父親の比較においては、この帰宅時間のギャップがもっとも大きいものだ。

このように、フィンランドの労働環境が労働時間の長さにおいて日本と大いに異なるのは明白である。結果、フィンランドの親たちは子どもたちとより長い時間を一緒に過ごすことができる。労働時間の短さは、家庭生活に関連した他要因にも反映されている。フィンランドでは、祖父母との同居はほとんど見られず、定期的に外部の保育者を必要とする家庭はほとんどない。その代わりに、片方の親が子どもを保育所に連れて行き、もう片方が迎えに行くなど、役割を分担することで、互いの勤務時間を短縮することなく、また子どもを保育所に預ける時間を延長したりもせずに子育てを行っている。ほとんどの保育所は午後5時に閉まるため、親たちは子どもたちを迎えに行かないわけにはいかない。加えて、子どもも親も最後の一人になりたくないという気持がある。以上のことが、フィンランドの親たちが(父母ともに)アジア諸国と比較して子どもたちとより

長く一緒に過ごす理由と思われる。

家庭生活における祖父母の役割もフィンランドと調査対象のアジア諸国の間では異なるようだ。祖父母が近居の場合は、放課後の課外活動などに子どもたちを連れて行く時などに、両親の助けになることもあるだろうが、毎日のように祖父母を頼る親はほとんどいない。代わりに、サッカーの練習などの習いごととに連れて行く際には、他の子どもたちの親たちと協力しあうのが一般的だ。だがそうはいっても大部分の親は祖父母の存在を高く評価している。学校や保育所の長期休暇中、働く両親の代わりに、祖父母が保育者としての役割を果たすことがよくあるからだ。

アジア諸国と比べて、フィンランドの親たち(父親含む)は明らかに自分の子どもたちと過ごす時間が長い。またアジア諸国と異なり、屋外活動の時間も長い。フィンランドにおけるこの「屋外」活動には、バルコニーや中庭で赤ちゃんを乳母車に乗せたまま眠らせたりすることも含まれており、気温が氷点下となる冬でも同じように過ごすほど、小さい頃から野外活動は重視されている。この屋外活動は、保育所の日々のスケジュールでも大きな役割を演じている。

同調査では、家事や子どもに関係する多くの活動に関してフィンランドの母親と父親が相対的な平等関係にあることも明らかにされている。しかし他諸国と同様に、母親は特に家事において主たる負担がかかっているようだ。この結果はフィンランドの家庭における不完全な男女平等を示した国家研究の結果を裏付けている。

同様に、母親の全体的な生活満足度に関する調査結果は、初期のフィンランド比較研究も裏付けている。たとえ小さな子どもを持つ親が仕事と子育ての両立に大変さを感じたとしても、一般的なフィンランド国民および子どもを持つ親たちは、自分たちの生活に非常に満足している。このことがおそらく(国と自治体からの財政援助もあり)、多くの西欧諸国と比べてフィンランドの母親が家で子どもと過ごす時間が長い傾向にある理由なのだろう。この点は、保育所に子どもを預けている母親を対象とした現在の調査ではカバーされていない部分である。